

グレートハンガー

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

ある映画の主人公Aの話です。30代始めの女性Aは、本職の仕事と別に必死にバイトまでしてお金を貯めます。そのお金で、ある日Aはアフリカに旅立ちます。Aは、漠然とジャングルや草原のサファリパーク、砂漠でのキャラバン体験といったイメージを夢見ていました。彼女は、アフリカ旅行のロマンにドキドキしながら、ケニヤとボツワナ経由でアフリカ南部のカラハリ砂漠を訪ねます。一か月ほどの旅から帰ってきたAを迎えた友人たちは、出発前の興奮気味の顔ではないAの様子を見て不思議になります。そして、予想とは違うお土産をもらうこととなります。Aからのお土産は、象牙の細工品などのモノではなく、カラハリ砂漠に住んでいる、一般にサン人として知られるブッシュマンの話でした。

Aは、ブッシュマンの村に滞在しながら、何度か彼らの踊りや祭りを経験したと言いました。やかましい打楽器の奏楽に合わせて、腰のあたりで両手を左右に振りながら始まる彼らの伝統の踊りは、次第に両手を頭の上まであげていく。そして最後は、空を仰ぐような形で盛り上がり終わると言う。そしてその踊りのジェスチャーにはそれぞれ意味があったと言う。最初、腰のところで手を振るのは「リトルハンガー (little hunger)」を意味し、最後の手の動きは「グレートハンガー (great hunger)」を表すという。それは、単に遊びや踊りではなく、一種の祭典であったのだという、土産話でした。

ここで言うリトルハンガーは、食べ物に対する飢えのことです。誰もが経験する肉体の本能に関わることです。そして、グレートハンガーの空を仰ぐ手の先が指しているのは、私たちは何故生きているのか、人間としての生の意味は何かを問う、霊的な飢えを指します。ブッシュマンは、いわゆる現代文明の利器には恵まれていないけれども、村をあげてしきりに生のまことの意味を問い続ける素晴らしい伝統を持っていたのです。

コロナ禍の中で、しばしばマスクの買いだめなどのニュースが流れました。よその国では初期の頃、不安にそそのかされて略奪などもありました。もちろん自分の身の安全を確保することは大切です。食べ物がなければ飢え死にすることもあります。しかし、こういう時代だからこそ、私たちは我に返って人生の意味を問い直すことを忘れてはいけないと思います。目の前のことに執着するリトルハンガーではなく、時代の変化を眺めながら、生の理由、生命の意味を思い巡らす時として過ごすことを、Aが学んだように、アフリカのブッシュマンのグレートハンガーから学びたいと思います。映画「バーニング」(原作「納屋を焼く」村上春樹)より

「しかし、神の人よ、あなたはこれらのことを避けなさい。正義、信心、信仰、愛、忍耐、
柔和を追い求めなさい。信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい」

(テモテへの手紙 I 第 6 章 11～12 節)